

軍師・参謀を 志す人のために

Vol.28



人の心の奥底にあるものに
接するとき

人の心を操ろうとする策謀

◇ 東京国立博物館の特別展「三国志」

お読みいただいているこの小冊子（「軍師・参謀を志す人のために」Vol.28）は、2019年（令和元年）夏のコミックマーケット96（C96）開催時期に合わせて制作しています。（当サークル自体は、C96には残念ながら抽選漏れとなりました。）

このC96が東京の有明・青海地区で開かれている時期（2019年8月9日～12日）に、上野の東京国立博物館では、特別展「三国志」が開催されています（7月9日～9月16日／その後、10月1日からは九州国立博物館にて2020年1月5日まで開催）。この特別展は、古代中国の漢の時代から、魏、呉、蜀という国々が天下を三分した時代にかけての様々な文物を、最新の研究成果に基づき紹介しようというものです。

軍師や参謀のような役割を務められるようになりたいとの志を持っておられる、この小冊子の読者の皆さんの中には、戦乱と陰謀に明け暮れる三国志の時代を熱く駆け抜けた軍師や英雄たちに、強く関心を抱く向きも多いのではないかと思います。

◇ 思いを一層かき立てる展示構成

上野の東京国博の館内では、関羽像や儀仗俑といった展示物の前にたくさんの人だかりが見られ、観覧している皆さんはそれぞれに、三国志の時代に活躍する個性豊かな人物たちへ、思いをはせておられるようでした。今回の特別展は展示室内での写真撮影が許可されていますが、その画像は個人利用に限定されています。このため、私が撮影した画像を、お読みいただいているこの小冊子にて皆さんにお届けすることができず、館内の雰囲気や熱気といったものもお伝えすることができない点を残念に思います。

この東京国博の特別展では、漫画家の横山光輝氏が描いた長編「三国志」の原画や、NHKで昭和57年（1982年）から放送された人形劇「三国志」に登場する人形たちが展示されていて（これらは、この特別展の

図録にも写真が掲載されています)、物語としての三国志にて活躍する英雄たちに対して抱いていた、自身の思いを一層かき立てる展示構成となっていました。

こうした展示物を、やや興奮気味に片端から撮影しつつ見ていたこの小冊子の制作者は、魏の武王（武帝）曹操そうそうが埋葬されたという墳墓（高陵）が最近になって発掘されて、ここから出土したものだという文品にとりわけ強く心を奪われたのでした。

◇ 悪役 曹操

今回の展示対象としてかなり力が入れられていた、曹操という人については、横山光輝氏も自身の作品の中で「この人物が三国志の本当の主人公であるとさえ言われる」と述べており（潮出版社「三国志」／「青年曹操」の章）、実際に横山氏のこの作品の中では、本来の（？）主人公である劉備りゅうびの宿敵役として非常に魅力的な姿に描かれています。

しかし、古来、中国やその文化を輸入していた周辺諸国で曹操は、忠と義を貫き世に平和の実現をめざそうとする善的存在である劉備（あるいは蜀）にとっての、忌み嫌われるべき敵役かたきやくであったことは、読者のかたがたもご案内のとおりです。曹操は長い間、奸智にたけたさまざまな詐術を繰り出し、乱世にあって天下を欲しいままにしようとするよこしま邪な、悪の元締めだと見られてきました。

もちろん、そうした人物像を決定的なものとして人々の心の中に強く形成したのは言うまでもなく、中国の明代はじめ頃に羅貫中らかんちゆうにより著された、いわば“歴史小説”である「三国志演義」や、これに基づく講談、戯曲、演劇、物語などです。

◇ 曹操が人々を欺いたエピソード

三国志演義の中での曹操の悪役ぶり、すなわち、自分のためなら平気で人を騙だますような汚い詐術を尽くす者、という姿を描くための、いわば材料となったと思われるエピソードは、中国の古い時代の様々な書物中に散見されます。

中国で南北朝時代に南朝宋の皇族でもあった劉義慶りゅうぎけいという人物が著した、「世説新語」という書には、悪知恵が働いて酷薄な曹操の姿を伝える逸話が多く載せられています。この世説新語で、人々を巧みに欺い

た逸話が集められている章である「^{かけつ}仮譎篇」の中にある、曹操が使った策だとして語られている話を少し眺めてみることにしましょう。これらは、三国志演義や、これをもとにした現代の小説、漫画などでも、曹操という人物を描く上での格好の素材として用いられており、(史実であるかどうかは別として)たいへん有名なものとなっています(もちろん、劉義慶の属する南朝宋が曹氏の魏を正統だと認めていなかったことからくる影響については、留意しておかなければならないでしょう)。

◇ 少年時代の無軌道ぶり

曹操は若い頃、いつも袁紹^{えんしやう}と一緒につるんで街を歩き、品行が修まらず、ほしいままの振る舞いをしていた。あるとき、結婚の祭礼が行われている家を見かけると袁紹とともにその庭に忍び込んだ。そして、夜更けになって「泥棒がいるぞ」とわめき叫んで邸内を混乱させ、そのすきに中へ押し入り二人で花嫁をさらって逃げ出すという悪事をしでかした。ところがそこから逃げ帰る途中に、袁紹が誤って、とげのあるいばらの茂みの中にはまり込んでしまい、そこで身動きができなくなってしまった。すると曹操はまた、「泥棒はここにいるぞ」と叫んだ。その叫び声に袁紹は、追っ手に捕まるのではと慌てて、切羽詰まって自力でいばらの茂みから転げ出て来て、そうしてそのまま二人で何とか逃げおこせたという。

こうした、曹操の少年時代の無軌道ぶり、無頼の働きの様子について、中国古典文学が専門である川合康三氏は「曹操が袁紹とかかわりを持ったのは、さらにのちのことであって、悪ふざけの仲間にしろ、仇どうしの関係にしろ、少年時代の曹操と袁紹をコンビにして語るの、後年の二人の関係を推し及ぼした虚構である」と指摘しています。そして、正史である「三国志」が曹操のことを「若い頃から^{ほうとう}放蕩で行いがおさまらない」性質であったと記していることについて、宦官(宮廷や後宮に仕えた、去勢された男性の役人)の家の出だという、自身の生い立ちに関する負の意識を持つ曹操の、屈折した心理をこうした振る舞いに読み取ろうとする見方を退け、「そこに浮かび上がってくるのは、型におさまりきらない、元気すぎる少年であろう」と擁護しておられます。さらに曹操の、音楽や書法から囲碁にまで及ぶ多方面にわたる才能について、「こうした広い興味と能力は、子供のときから学ばなければ、身につく

ものではない」として「曹操が終生たいせつにした学問や文学は、少年の日にその基盤が形成されたはずである」とも推測しています（「曹操一矛を横たえて詩を賦す―」ちくま文庫）。

◇ 窮地を脱する「梅の実」の策

曹操が人々を巧みに欺いたとされる策について、前掲の「世説新語」には、さらに次のような話も取り上げられています。

曹操が軍勢を引き連れて行軍している途中、水場へと通じる道がわからなくなってしまい、全軍の兵士たちは喉の渇きに苦しんでいた。そのとき曹操は「この先には大きな梅林があって、甘酸っぱい実をたくさんつけているぞ。それで渇きを癒やせ」との触れを出した。それを聞いた兵士たちは、皆、口の中に唾がわいてきて一時的に渇きを忘れ、そのおかげでなんとか隊列を移動させて、前方の水源地までたどり着くことができた。

このように窮地を脱するために曹操が用いた、上記の「梅の実」の策を、この小冊子の制作者も使ってみる機会がありました。

この小冊子の制作者はかつて、昭和という時代がそろそろ終わりを迎えるという予感の漂う頃に、勤務している会社の中で進められていたプロジェクトの遂行に関わる、ある一つの小さな分野をカバーしたサブプロジェクトのチーム運営を任されていたことがあります。

このプロジェクトは、もともとその目標達成のためには乗り越えるべき困難な壁がいくつもあった上に、会社内外の環境が安定せず同時進行的にさまざまな状況がどんどん変化していき、それに応じて、調整を図る必要のある関係先は広がり対処すべき課題も当初の想定を遙かに超えて膨らんでいくという、たちの悪いものでした。

この小冊子の制作者のもとに集まってくれていた（サブ）プロジェクトチームのメンバーたちは、徹夜の泊まり込み、休日出勤、遠隔地への日帰り弾丸出張といった勤務の連続のうえに、こうしたひどい状況の終わりが見えてこない毎日で、過労は極まり、疲弊しきっていました。そうです、今の時代で言えば完全なる「ブラック」の状態だったのです。しかし、この小冊子の制作者としては、このチームメンバーらには、今しばらくこうした状況に耐えて頑張ってもらおうしかありませんでした。

このとき、この小冊子の制作者はひどいことに、曹操が用いた「梅の実」の策を応用しようとしたのです。

◇ 蜃気楼しんきろうのようなゴール

終わりとなるべき地点が見えず、いつまでやらされるかが不明な状態の続く環境は、心理的に、人間を非常に疲れさせます。かつて陸軍では行き先を告げられない行軍は非常に苦しいものとして認識されていたようです。

このため、当時のこの小冊子の制作者は、チームメンバーたちに幻想上の終着点ゴールを示して、ある種の催眠術をかけることを試みました。

この小冊子の制作者はチームのメンバーらに対して、「他のサブプロジェクト・チームが挙げ始めているいくつかの成果と、こちらの出しつつある成果とを合わせたら、我々が抱えている困難の大半は解決されて楽になるはずだから、あと少し、あともう少しだけ頑張ろう」と繰り返し言い続け、メンバーたちに暗示をかけたのです。

しかしこの「楽になる」はずの終着点は、そもそも先にご説明したようなプロジェクト全体が置かれた環境のもとでは、蜃気楼しんきろうみたいに、こちらが近づこうと追ううちにあちらも向こうへとどんどん逃げていってしまい、両者の間がいつまでも縮まらないものだったのです（しかし、その蜃気楼を追っている者からすると、少しづつ近づいているような気になるものです）。

◇ 一度限りで二度とは使えぬ手法

こうした、(旧来の演劇などに登場する)曹操がとったような、腹黒い騙しの手法は、残念ながら使えるのは一度きりであって、二度とは用いることができません。もちろんそれは、行軍中に「前方に梅林がある」と再度聞かされた者たちが、それを『あ～、またか』と思って、騙されないためであることは、言うまでもありません。

幸いながら、この小冊子の制作者が試みた曹操の「梅の実」の策に関しては、その蜃気楼が消えてしまう前に、なんとかプロジェクトの終了を迎えることができました。しかし、今後同じような場面が生じた際に「ある(仮定の)時点まで頑張れば楽になるから」という言葉でメンバーたちの士気を鼓舞しようとしても、一度目のような効果は決して上